

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年 5月 3日現在

機関番号：32689

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2011～2012

課題番号：23820059

研究課題名（和文） 中国新石器時代末期における環太行山脈地区文化圏の形成過程—土器分析を中心に—

研究課題名（英文） The formation process of Tai Hang mountains area in Final stage of Chinese Neolithic age : Focused on analysing pottery

研究代表者

久保田 慎二 (KUBOTA SHINJI)

早稲田大学・文学学術院・助手

研究者番号：00609901

研究成果の概要（和文）：

環太行山脈地区は太行山脈周辺の山西省、内蒙古自治区中南部、河北省・北京市を含む。これらの各地域ごとに土器編年を作成し、それぞれの併行関係を整理すると、6期に区分できる。これら地域間では第5期以前には部分的な交流は認められるが、太行山脈を隔てて異なる地域文化が存在した。しかし第6期になるとそれ以前より徐々に形成されてきた交流ルートを通して、内蒙古中南部に発する空三足器を中心とする文化要素を各地域が受容する。そして最終的に近似した土器様式を有する環太行山脈地区文化圏が形成されるに至る。

研究成果の概要（英文）：

Tai Hang mountains area covers Shanxi Province, south-central Neimenggu Province, Hebei Province and Beijing city.

At first, construct pottery sequences in each areas, and organize temporal parallel relationship between these areas. As a result it can divide pottery sequences into 6 periods.

Before fifth period, some communication can be recognized between each areas. But there were different local cultures in each areas. After sixth period, all areas accept the culture elements including three-legged pottery that originates from south-central Neimenggu Province, through the communication route gradually developed. And finally, shape the cultural sphere of Tai Hang mountains area that have common pottery style.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2011年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2012年度	1,100,000	330,000	1,430,000
総計	2,300,000	690,000	2,990,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・考古学

キーワード：太行山脈・環太行山脈地区文化圏・空三足器・鬲・地域間交流・土器編年

## 1. 研究開始当初の背景

太行山脈は中国華北地域の中央を南北に走る2000m級の山脈である。その西側には山西省、北側には内蒙古自治区中南部、東側には河北省・北京市などが位置し、新石

器時代前期からこれらの地域間で交流が行われたことが土器の器種や組成から分かっている。地域間交流の際に重要となるのがルートであり、それを規制したのが太行山脈であった。特に新石器時代末期では、内

蒙古中南部に発する鬲などの空三足器が南下し、その際に太行山脈を分水嶺として東西に同一起源の文化要素が流入し、その後各地で独自の変遷を辿るに至る。そして、結果的に類似した土器をもつ地域が太行山脈周辺に見られるに至る。報告者はこれを「環太行山脈地区文化圏」とし、これまでその形成過程を理解しようと注力してきた。

## 2. 研究の目的

本研究では、中国新石器時代末期の太行山脈周辺に設定できる環太行山脈地区文化圏の形成過程を示し、さらに当該地区と黄河中流域の関係を明らかにする。山西省、内蒙古自治区中南部、河北省から成る環太行山脈地区は、空三足土器など共通する文化要素を有する。当該地区文化圏は太行山脈周辺の地域間交流の中で形成されたが、太行山脈東西の土器には差異も見られ、それは太行山脈が地域間交流の障壁となったことに起因する。まず、この環太行山脈地区の文化圏における共通性と差異の形成過程について考察を加え、環太行山脈地区文化圏の形成過程について明らかにする。さらに当該地区と非空三足土器を主とする黄河中流域との比較を通して、両文化圏の対立構造がいつからどのような過程を経て形成されたのかを明らかにする。

## 3. 研究の方法

本研究では、まず環太行山脈地区の3地域の共通性と差異を時間軸に沿って明らかにし、その交流の変遷を確認するために、各地域における土器編年を構築することから始めた。その上で、各地域間の併行関係を確認すれば、時間軸の整理を行うことができる。そして、その時間軸に沿って土器の交流を明らかにすることで、環太行山脈地区文化圏の形成過程を解明することができる。なお、図1に本研究の対象地域の地図を挙げておく。

土器編年の構築方法としては、土器の属性分析を採用した。まず各遺跡から出土し報告された土器を集成し、それを機能を主とした基準から煮沸器・貯蔵器・供膳器に分類した。さらにそれらを細分し、大別形式、さらには細別形式に分けた。そして各細別形式の属性

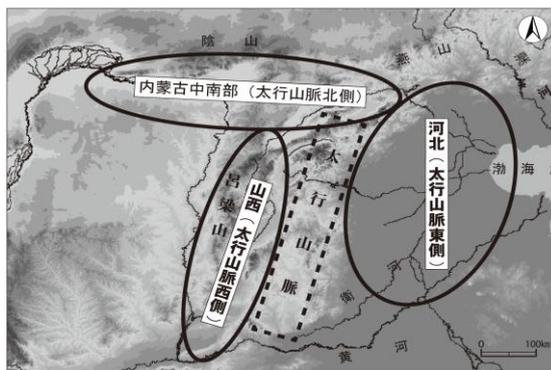


図1 本研究の地域区分

のうち、時間の変化をよく示すものを基準と

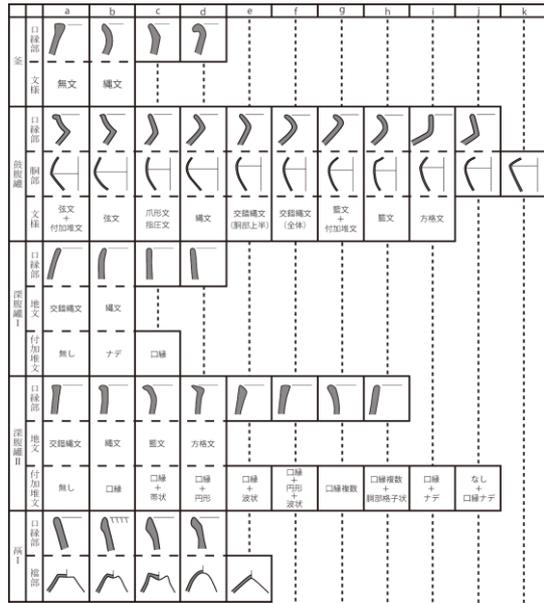


図2 内蒙古中南部の属性分類表

して分類した。なお、属性分類の基準の一例として、内蒙古中南部のものを図2に挙げておく。それぞれの分類された属性の組み合わせを確認する作業としては、土器の一個体内における共伴関係から確かめた。これらの作業を経て、各土器の型式を設定することができる。さらに各型式間の一遺構内の共伴関係から、土器様式を明らかにした。土器様式の時間的前後関係については、前後する時期の土器との類似性や出土層位などから各型式に付加した時間を基準とした。以上より、各地域の土器編年を作成した。

次に、それらの土器編年の併行関係を確認し、環太行山脈地区の広域土器編年を構築した。具体的な方法としては、地域間で出土する類似土器あるいは搬入されたであろう同一型式の土器などを基準とした。

最後に、ここまでで整理した時間軸に沿って、地域間の交流関係を明らかにする。そして、どの時点から地域間交流が活発化し、さらに広域で類似した土器様式をもつようになるのかを確認することで、環太行山脈地区文化圏の形成を明らかにすることができる。また、黄河中流域の非空三足器文化圏を中心とした地域との対立関係も、環太行山脈地区文化圏の成立せしめる空三足器の広がりを確認することで、いつからどのように始まったのかを明確にすることができる。

## 4. 研究成果

ここまで述べた研究方法に沿って分析を進めた結果、以下のような結論が得られた。

まず土器編年については、太行山脈西側の山西では大きく5期に区分することができ

地域 広域	山西	内蒙古中南部			河北
		黄河兩岸地区	汾海・黄旗海地区	陰山地区	
第1期					I期前葉 I期後葉
					II期前葉 II期後葉 III期前葉
第2期	I期前葉 I期後葉		I期前葉 I期後葉		
		I期			
第3期	II期前葉 II期中葉 II期後葉	II期前葉 II期中葉 II期後葉	II期前葉 II期後葉	I期	III期後葉 IV期前葉
	III期前葉 III期後葉	III期前葉 III期中葉 III期後葉	III期前葉 III期中葉 III期後葉	II期前葉 II期後葉	IV期中葉
	IV期前葉 IV期中葉 IV期後葉	IV期前葉 IV期中葉 IV期後葉		III期前葉 III期中葉 III期後葉	IV期後葉
第5期	V期前葉 V期後葉	V期前葉 V期中葉 V期後葉	IV期後葉		V期前葉 V期後葉

図3 環太行山脈地区の併行関係

た。また太行山脈北側の内蒙古中南部はその地理的環境の複雑さからさらに3小地域に分けられ、それぞれ黄河兩岸地区が5期、岱海・黄旗海地区が4期、陰山地区が5期に区分できた。太行山脈東側の河北もやはり5期に区分することができる。そして、これらの併行関係を確認すると、図3のように広域編年を6期に分けることができる。

なお、これ以降、各地域の時期区分と広域編年の時期区分の名称を混同しないよう、広域編年の区分には「広域第1期」などのように表記していく。

以上の6期区分に沿って環太行山脈地区の交流関係の変遷を明らかにすると、以下のようになる。

環太行山脈地区における地域間交流の様相を通時的に整理すると、少しずつ交流ネットワークが形成されてきたことが分かる。広域第2期には東から西への太行山脈北回りのネットワークがあり、広域第3期になると太行山脈東側で南から北へ廟底溝文化が伝わりとともに、一部は太行山脈を直接抜けるルートを通じて河北へと抜ける。そして広域第4期では前時期以来形成された太行山脈東西を直接繋ぐネットワークを通じて大司空文化が山西へと影響を及ぼすようになる。第5期では地域間交流が停滞したが、この時期までに確実に太行山脈北側を抜けるルートや東西を直接結ぶルートが出現しており、より複雑な交流ネットワークが形成される素地はあった。そして広域第5期になると、太行山脈北側の内蒙古中南部に発した空三足器の影響が、以前に形成されたことのあるルートを通り太行山脈を分水嶺として南下

し、そして山西と河北の間では太行山脈を抜け、より共通性の高い土器様式を形成するに至ったのである。

言葉を換えれば、広域第6期以前、太行山脈は環太行山脈地区における地域間交流を妨げる障壁であった。そのため太行山脈の東西では異なる土器様式が成立した。例え釣魚台類型や大司空文化のように東西方向の交流が確認できても、それは遺跡数が少なかったり彩陶だけというように伝播する要素が限られていた。しかしながら、このような経験を得て形成された交流ネットワークを通じて、第6期になり新石器時代で初めて環太行山脈地区に煮沸器を中心に非常に近い土器様式が生まれるのである。そして、ここに環太行山脈地区文化圏が形成されるのである。

一方で、太行山脈の南側を流れる黄河中流域を通じた太行山脈東西の交流は多くなかった。その理由として黄河以南は一貫して鼎を主な煮沸器とする別系統の考古学文化が存在したためである。広域に影響を及ぼした廟底溝文化でさえも、山西や内蒙古中南部と異なり、セット関係をもった土器をそのまま受容することはなかった。逆に、その影響は環太行山脈地区でも広域第4期以降に山西や河北の南部で見られる。また、環太行山脈地区文化圏の指標となる鬲や罍などの空三足器も、黄河を越えて伝播することはなかった。

広域第6期に後続する時期には、この黄河以南に鼎を主な煮沸器とする非空三足土器系統の二里头文化が成立する。一方で、黄河以北の環太行山脈地区には空三足器を主な煮沸器とする環太行山脈地区文化圏が依然として残る。つまり、大まかに黄河を境界として南北に二つの文化圏が併存する構図ができあがる。そして、二里头文化第1期にはその影響が黄河を越えて山西の垣曲盆地や运城盆地、臨汾盆地など南部まで浸透し、二里头文化東下馮類型が成立する。一方、河北では二里头文化の影響を受容せず、鬲などを中心とする新石器時代以来の環太行山脈地区文化圏と同系統の土器が出土する。この環太行山脈文化圏の系統を継承し、二里头文化を受け入れなかった地域が先商文化となり、後の殷王朝へと繋がっていくのである。

このように、環太行山脈地区文化圏は新石器時代末期に形成され、その後すぐに崩壊するのではなく、長くその影響力を残すことになる。このような意味でも、本研究で試みた環太行山脈地区文化圏の形成過程を解明することに、極めて大きな意義を見出すことができる。

以上が、本研究を通して得られた研究成果である。今後は、初期王朝期とされる二里头文化期における環太行山脈地区文化圏の動

向を明らかにし、その中国史の中における位置付けをより明確にしていく必要がある。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計3件)

1. 久保田慎二「新石器時代におけるモノの伝播形態—空三足器を中心に」『中国考古学』査読有、2012、6-33頁
2. 久保田慎二「中国新石器時代における鼎から鬲への煮沸器転換に関する実験考古学的研究—山西省西南部を中心に—」『史観』第166冊、査読無、2012、100-120頁
3. 久保田慎二「墓から見た馬家浜文化の地域性」『古代』125号、査読有、2011、1-23頁

[学会発表] (計2件)

1. 久保田慎二「中国新石器時代における空三足器からみたモノの拡散」、日本中国考古学会2011年度大会、2011年12月3日、東京大学
2. 久保田慎二「中国新石器時代における鼎から鬲への煮沸器転換に関する実験考古学的研究」、早稲田大学考古学会2011年度研究発表会』2011年12月10日、早稲田大学

[図書] (計2件)

1. 久保田慎二、株式会社スマッシュ、『中国新石器時代末期における環太行山脈地区文化圏の形成過程—土器分析を中心に—2011-2012年度科学研究費補助金(研究スタート支援)研究成果報告書』2013、146頁
2. 岡内三眞、久保田慎二ほか63名、同成社、『技術と交流の考古学』2013、397-410頁

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

久保田 慎二 (KUBOTA SHINJI)  
早稲田大学・文学学術院・助手  
研究者番号：00609901

##### (2) 研究分担者

なし

##### (3) 連携研究者

なし